

勤で描く パースのコツ

田中英介 著



彰国社

はじめに

パース(正式にはパースペクティブ)、つまり透視図は、図法という学問として位置づけられているために、そのテクニックを紹介する場合、どうしても理論的、数学的になってしまいます。技法を解く数多くの書物を読んでも難解で、なかなかやる気を起こす読者は少ないのが現状です。

しかしながら、建築やインテリアの分野では依然としてパースの必要性や重要性は大きく、特にデザイン系の分野では三次元で空間を考えるため、どうしてもパースの知識が必要不可欠になります。つまり、パースが描けないとデザインできない、と言ってもおおげさな話ではないのです。

本書は、なるべく理論的な解説を避け、感覚的、視覚的にパースを描けるように編集してみました。わかりやすく申せば、目で見て日常生活の物事を判断する感覚、目測の感覚、勘に頼るなど、体感的に「こんな程度、このくらい、半分ほど」という軽いノリでパースを理解し、描けるようになるためのコツとしてまとめてあります。

どうせなら初めてパースに触れるひとから、セミプロくらいの経験者の方までが使えるように、考え方やカラーリングに至るまでパースの全貌をカバーしています。

ともかく、パースを描くことが「つらい、面倒、苦手」という意識を、「楽しい、簡単、得意」となるまで、じっくり構えて気長に自分のものにしていただきたいと思います。

1997年 初夏

田中英介



アプローチ編

立体的に見せるコツ …… 10

平面的なものを立体的に見せる …… 10

平面図のイラスト風仕上げ …… 14

立面図のパース風仕上げ …… 20

奥行をつくるコツ …… 26

正方形に奥行を与え、さいころ状にする …… 26

2階建てのさいころから無限の奥行をつくる …… 28

パースをより理解するコツ …… 30

人の目は都合よく調節できるレンズ …… 30

地面からの目の高さを決める——アイレベルの設定 …… 31

見ている目の高さは水平線と一致する …… 32

牛乳パックも冷蔵庫も超高層ビルも同じ? …… 33

トレーニング編

室内パースを30分以内で描くコツ …… 36

描くための基本プロセスを知る …… 36

基本は1消点——作図プロセスを完全にマスターする …… 42

強調したいコーナーは2消点を使う …… 44

外観パースを簡単に描くコツ …… 48

基本のパースラインをつくる …… 49

オリジナルパースラインの完成 …… 52

勾配や角度をつくるコツ …… 54

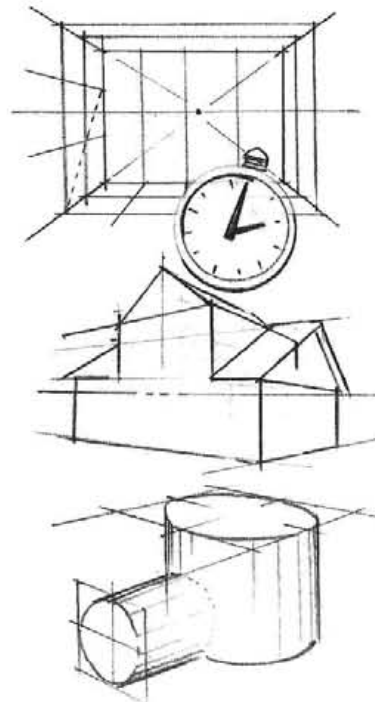
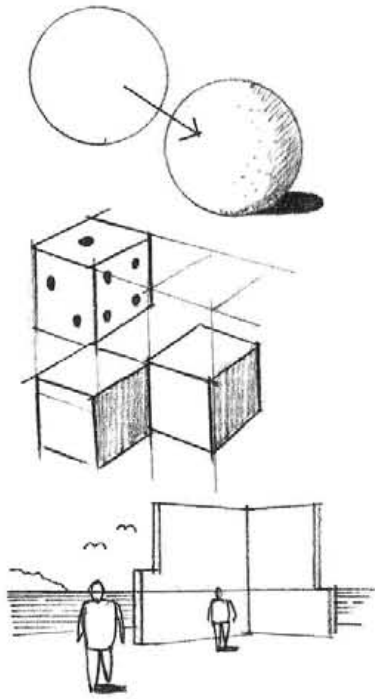
平行のVPと勾配のVP …… 56

カーブや円を描くコツ …… 58

起点・中心・接線の基本ルールを守る …… 59

カーブの最大ふくらみラインをそろえる …… 60

清書するときに円定規またはテンプレートを使う …… 61



テクニック編

タッチを出すコツ …… 64

強弱のコントロールとスピード …… 64

濃淡のコントロールとバランス …… 66

明暗表現のルール …… 67

定規の線、フリーハンドの線 …… 68

人物表現のコツ …… 72

人物のスケールスタディ …… 72

車表現のコツ …… 75

車のスケールスタディ …… 75

植栽・樹木・外構表現のコツ …… 78

樹木の基本形と枝振り …… 78

葉っぱのストロークと密度 …… 79

石積み・れんが積み …… 80

芝生・起伏・法面 …… 81

樹木で画面のフレームをつくる …… 82

窓面・ガラス面の表現のコツ …… 83

硬さと透過性 …… 83

奥行感の強調と映り込み …… 84

照明効果 …… 85

陰影表現のコツ …… 86

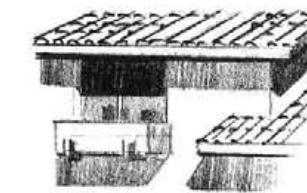
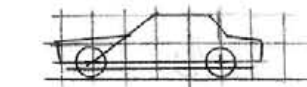
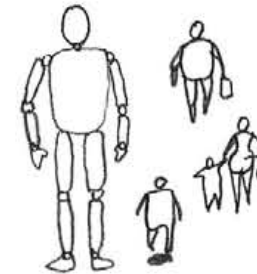
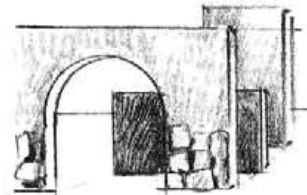
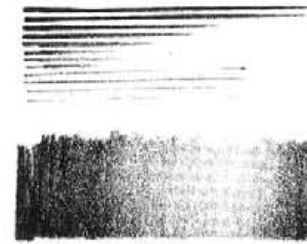
角度と方向を決める …… 86

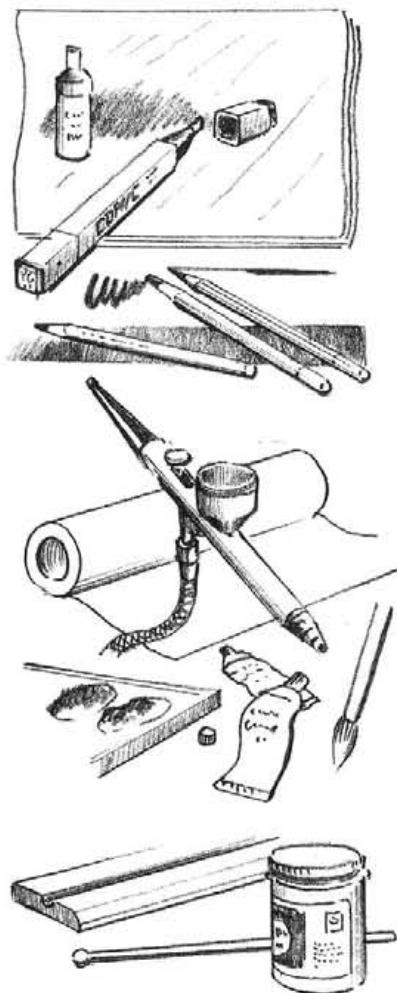
影の長さは凹凸の大きさに比例する …… 87

影の濃さを微妙に変える …… 88

斜面の影 …… 88

インテリアの影 …… 89





カラーリング編

マーカー描法のコツ …… 92

- 専用パッドとWトレーシングペーパーとを使い分ける …… 92
- 広い面をザックリと、擦らずに載せる感じで …… 92
- スピーディなストロークとマスキング …… 92
- 細描きマーカーの使い方 …… 93

色鉛筆描法のコツ …… 94

- 基本は鉛筆と同じ …… 94
- 芯先の硬いタイプがベスト …… 95
- 同系色の混色で深みのある色合いを表現する …… 96

エアブラシ描法のコツ …… 98

- すべてはマスキングで決まる …… 98
- ブラッシングの決め手はグラデーション …… 100
- 砂目テクニックで素材感を …… 100

水彩絵の具描法のコツ …… 101

- 透明感十分な乾燥を待つ …… 101
- マスキングで塗りやすくさせる …… 102
- 色むらを気にしない …… 102

ハイライト表現のコツ …… 103

- ホワイトはDM社製がベスト …… 103
- ガラス棒と細描き面相筆は必需品 …… 103
- 慣れれば便利な極細白抜き技 …… 103

すべての描法をミックスして描くコツ …… 104

- それぞれの得意技を使う …… 104
- 影と外壁をエアブラシで吹く …… 105
- 色鉛筆でタッチアップする …… 106
- 空はエアブラシが便利 …… 107

資料編

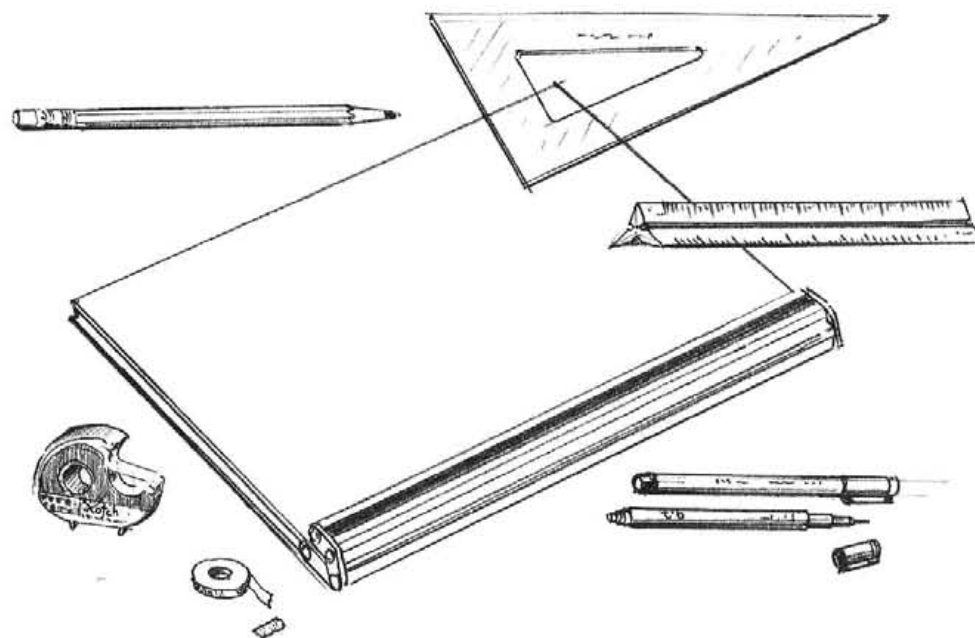
- インテリア用点景イラスト …… 110
- 人物 …… 112
- 車 …… 114
- 樹木 …… 116
- 点景用資料の加工要領 …… 118
- 糊付き透明シールが便利 …… 119

本書で使用する基本的な道具

- 消しゴム付き鉛筆 (HB)
- 三角定規 (透明・薄い・斜辺 35 程度)

- 15 cm の三角スケール
- A2 サイズの平行定規

- スコッチの貼ってはがせるテープ
- 製図用ドラフティングテープ
- 一般的なサインペン
- 細描きミリペン

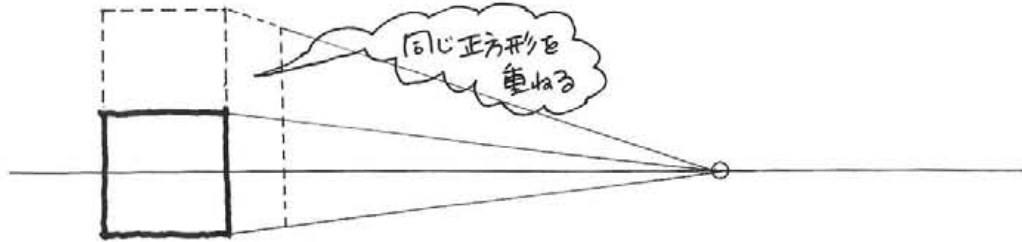


奥行をつくるコツ

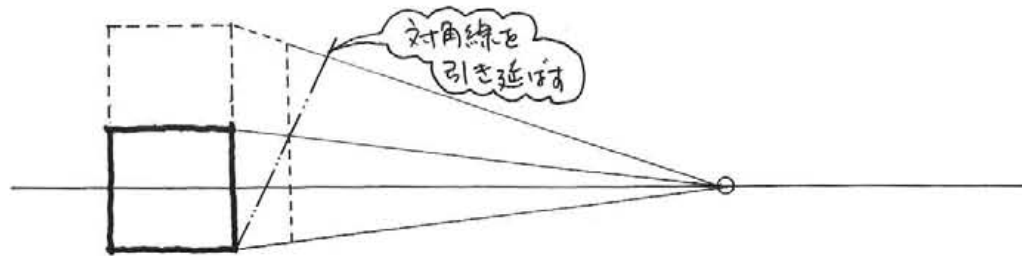
2階建てのさいころから無限の奥行をつくる

最初の奥行をつくる方法を理解したところで、さらにその奥行を増す要領を紹介します。

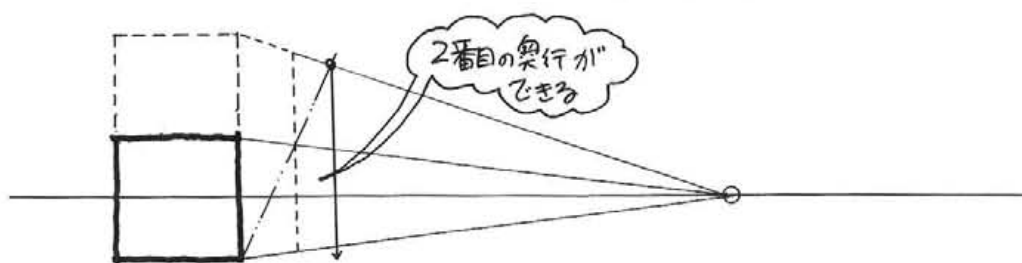
1. 最初につくったのとそっくり同じ正方形をその上に重ね、最初の奥行の位置をその正方形にも割り付けます。



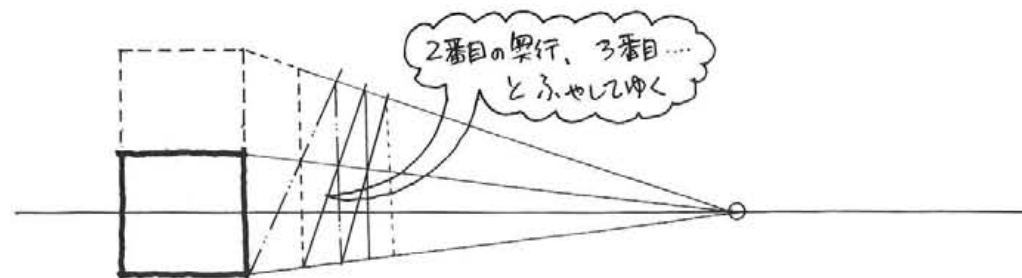
2. 下の正方形の奥行の面に図のように対角線を引き延ばし、上の正方形側面にもかかるようにしておきます。



3. 上の正方形の側面と対角線の交点を垂直に下ろせば、二番目の奥行が求められます。

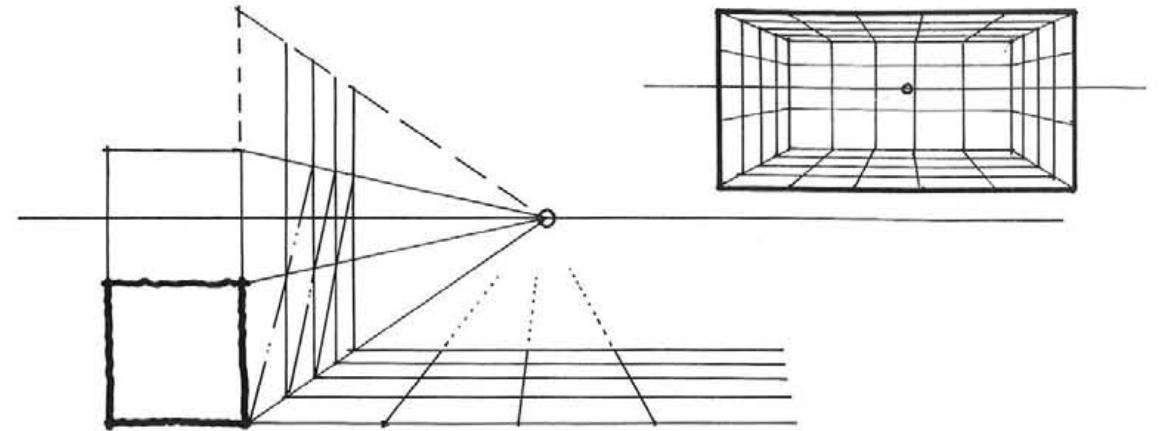


4. 新たにできた二番目の奥行側面に上記同様対角線を引き、順次奥行をつくれれば、無限に奥行をつくることができます。

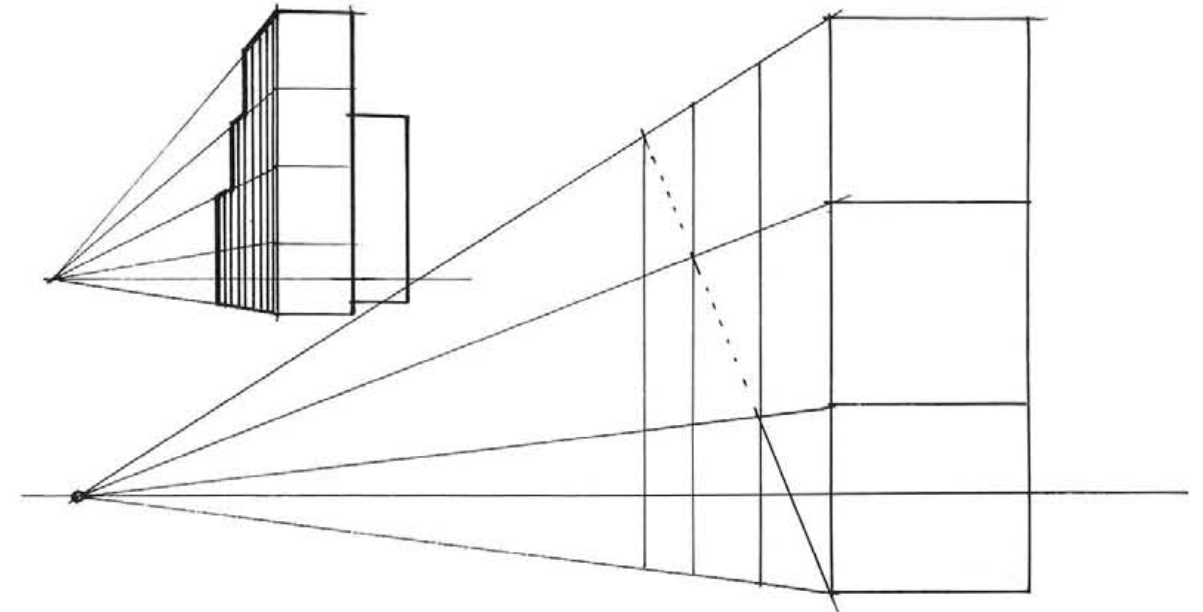


2階建てのさいころから無限の奥行をつくる

5. 最初に設ける正方形のスケールを1mとすれば、1mずつの奥行の割付けができます。インテリアのパースフレームづくりはこのスケールが便利です。



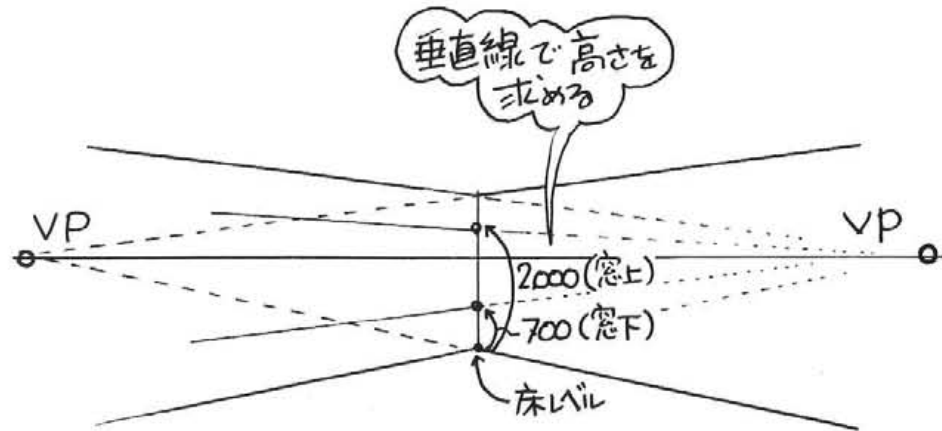
6. 最初の正方形を3mにすれば奥行は3mずつとなり、前述のように建物の1層分がスケールとしてでき上がるので、外観のパースフレームになります。



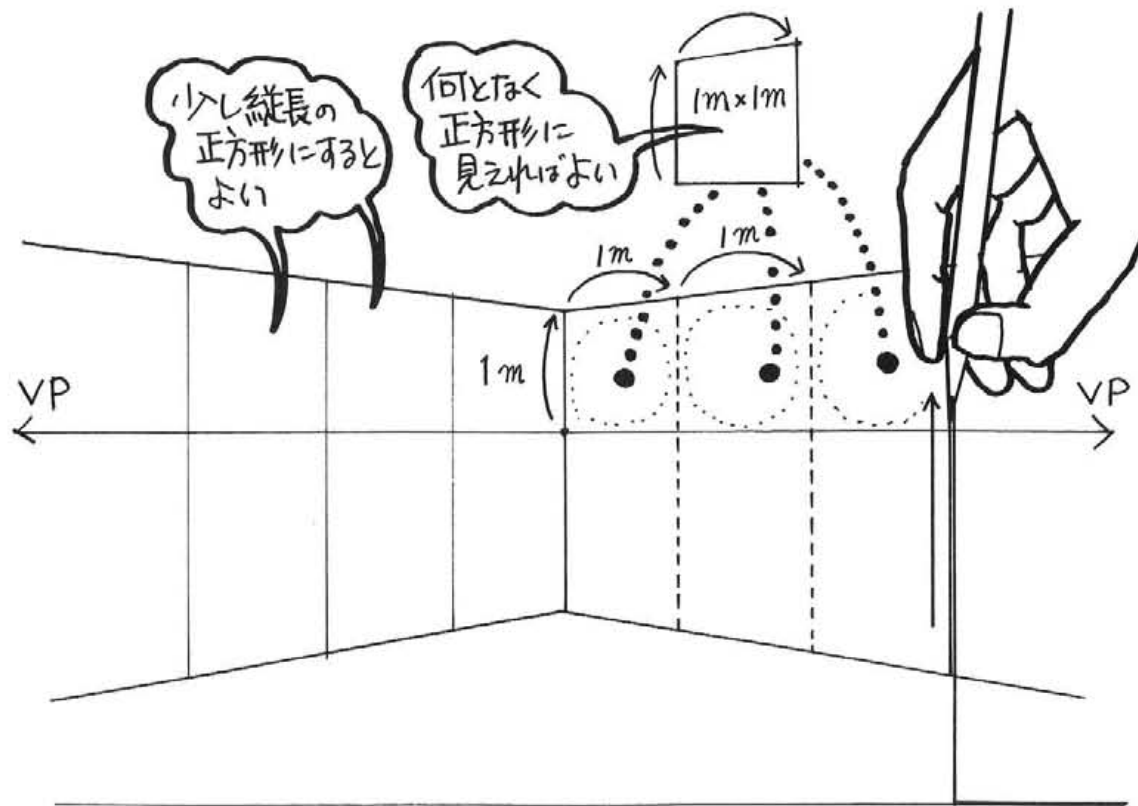
<ポイント> 住宅などは91cm間隔が多いが、作図上は1mで奥行をつくってもよい。でき上がりにはさほど差はなく作業性がよい。

室内パースを30分以内で描くコツ

2. 垂直線の右左 — 左右端の VP, 相互に反対側を選択してパースラインを得る
壁に表現されるパースラインは、垂直線 また、窓の高さなどは、1/50の縮尺を
を境にそれぞれ左右反対側の VP から もつ中央の垂直線から求めれば正確に補
引きます。 足できます。



3. 壁面への割付けは正方形らしく見えるように目測で行なう
水平線より上の1m分を用いて、左右に正方形を必要な数だけ割り付けます。

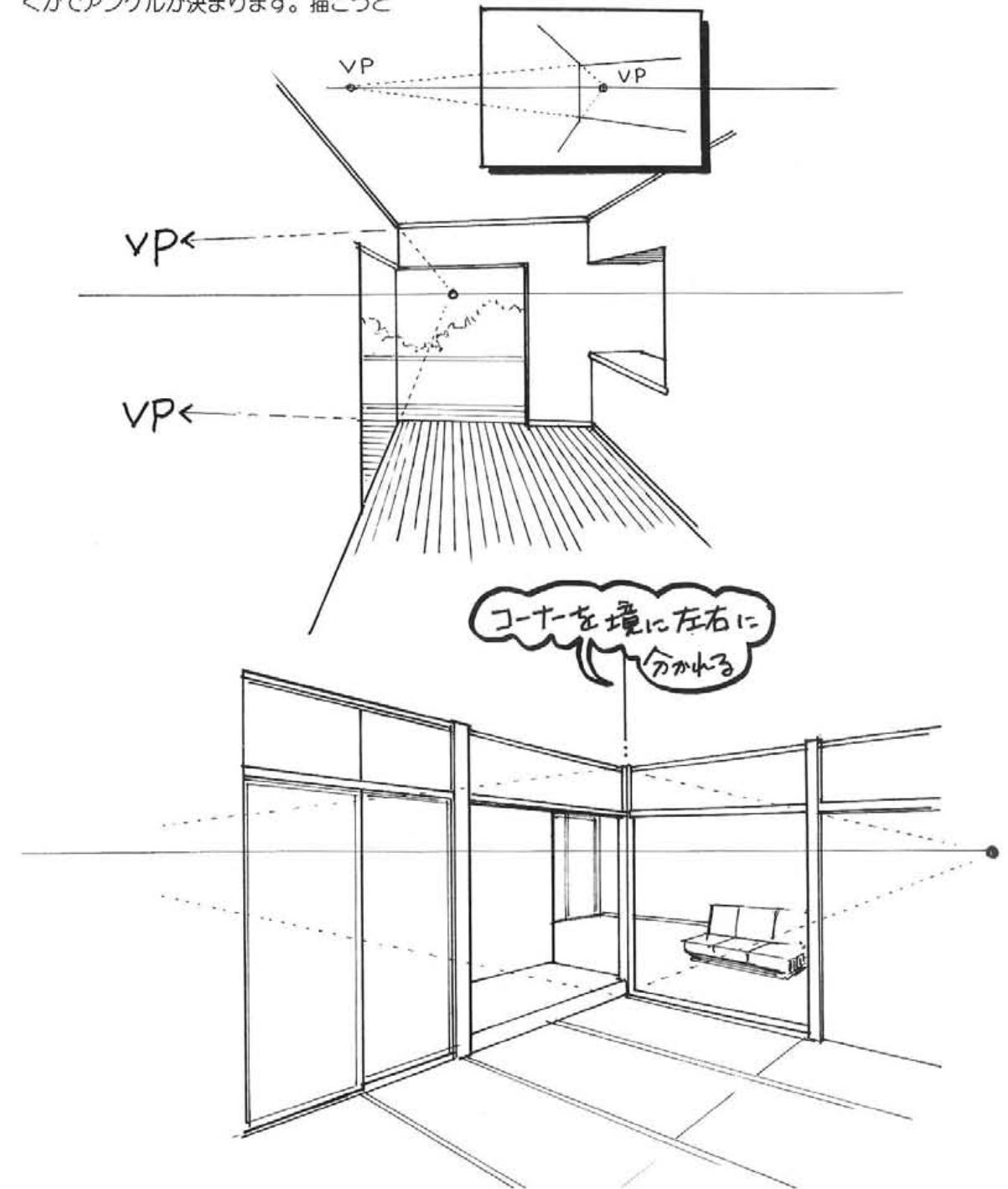


<ポイント> パースの場合、±10 cm 程度の寸法誤差を見込み、0.9~1.1 m は 1 m として作図するとよい。

強調したいコーナーは2消点を使う

4. どこをどう見るかを決める
どのような図法でも、スタンディングポイントとアイレベル、またどの方向を向
くかでアングルが決まります。描こうと

するパースは何を表すのか、その目的に
よってアングルも変わります。

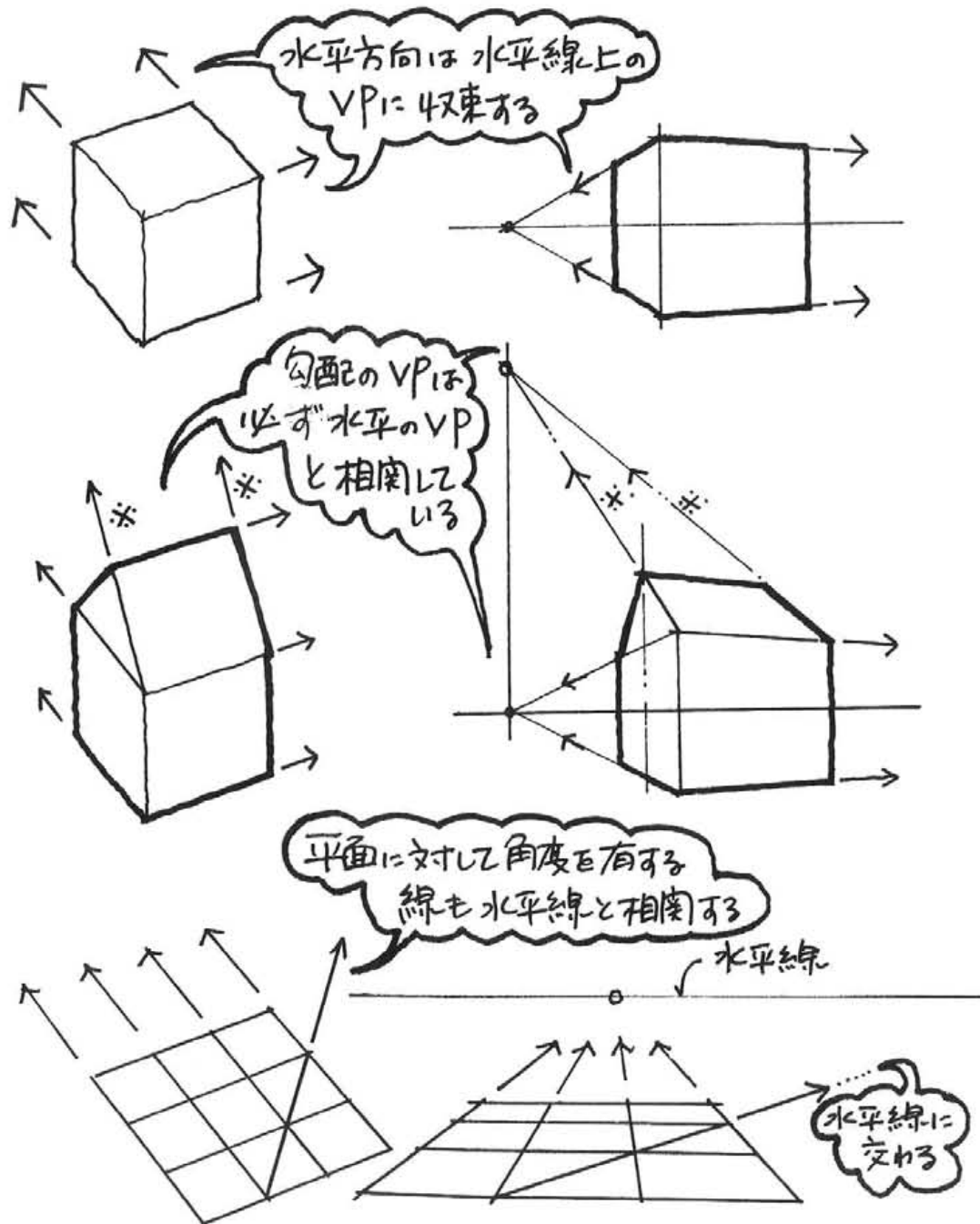


<ポイント> 立つ位置(スタンディングポイント)から遠ざかるほど広く見える。

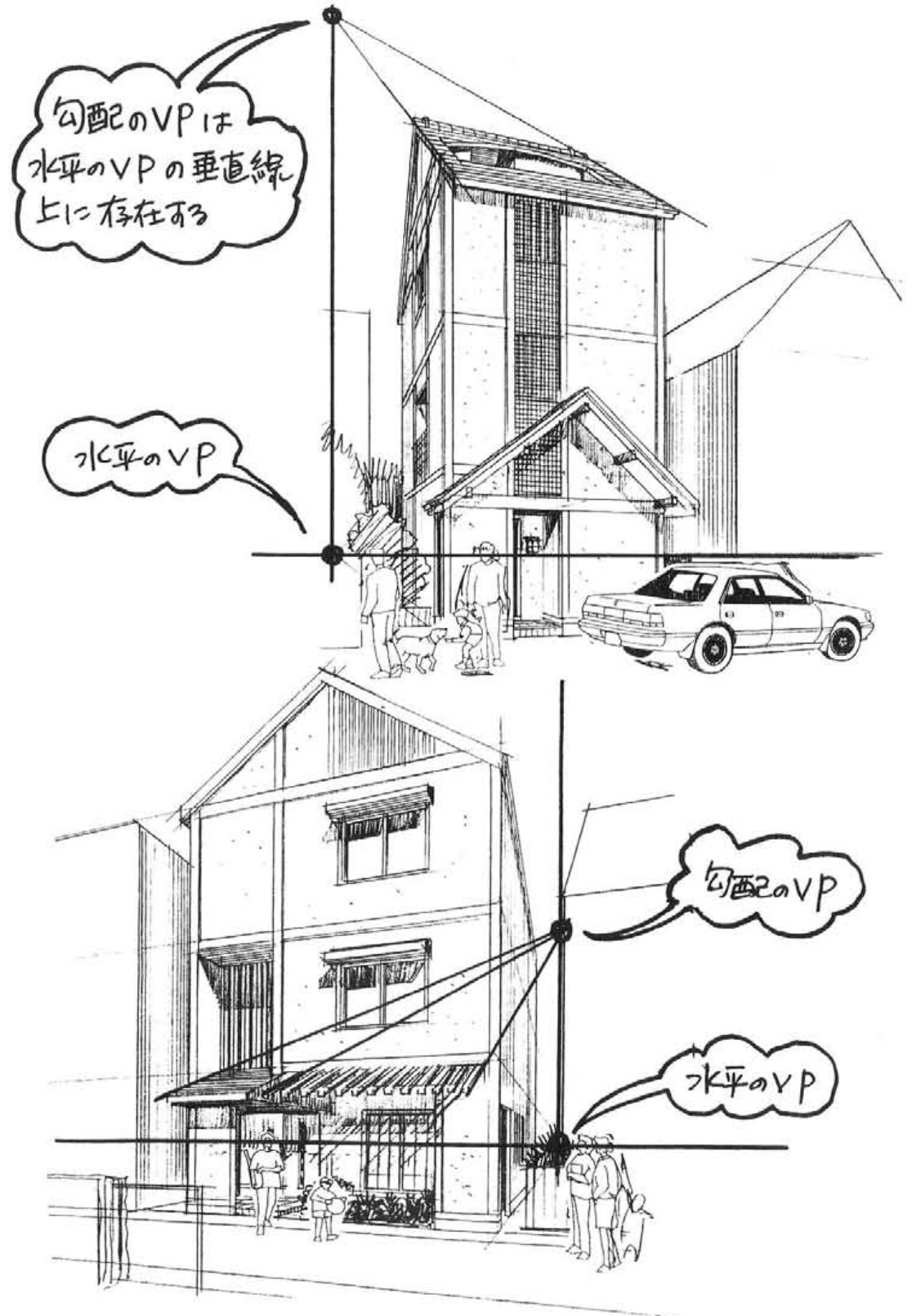
勾配や角度をつくるコツ

外観には屋根や階段など、角度や勾配の線がよく登場します。いままで描いてきたパースラインは、あくまでも水平方向と平行なパースラインです。

住宅の屋根などの勾配をどのようにつくるかを理解すれば、たいいていの外観パースは描くことができます。



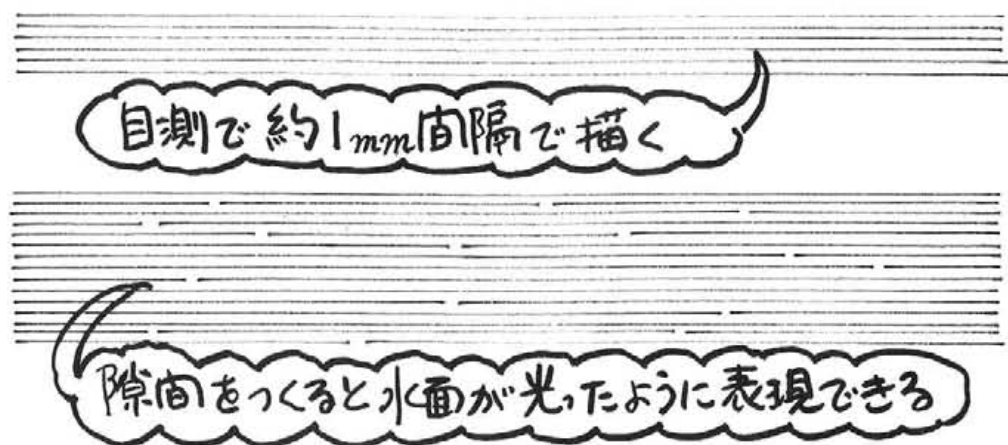
平行のVPと勾配のVP



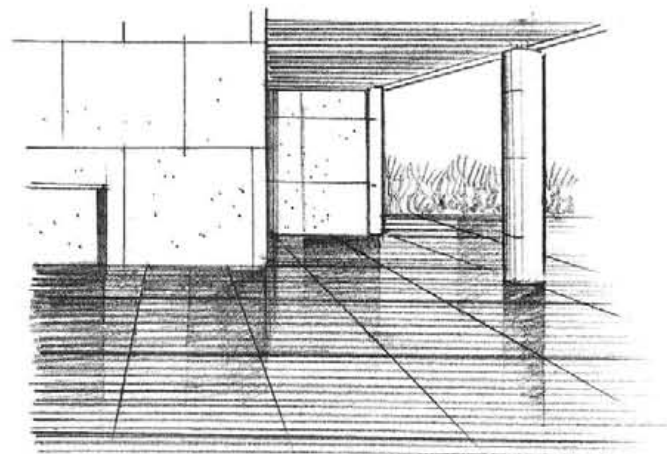
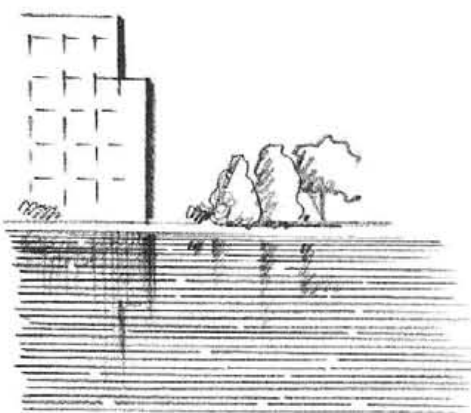
定規の線、フリーハンドの線

強弱や濃淡のタッチをさらに引き出すために、状況または素材によっては、定規を使うかフリーハンドによるかを選択するか、または組み合わせます。

1. 水面や大理石など、平滑な面は定規を使う
平滑な水面などはH程度の少し硬めの芯の鉛筆で、1mm程度の間隔をとって素早く定規を走らせます。その際、数本おきに途中に細かい隙間をあけた線を描くと光っている水面のように見えます。大理石のような硬く、平滑な素材も同様です。



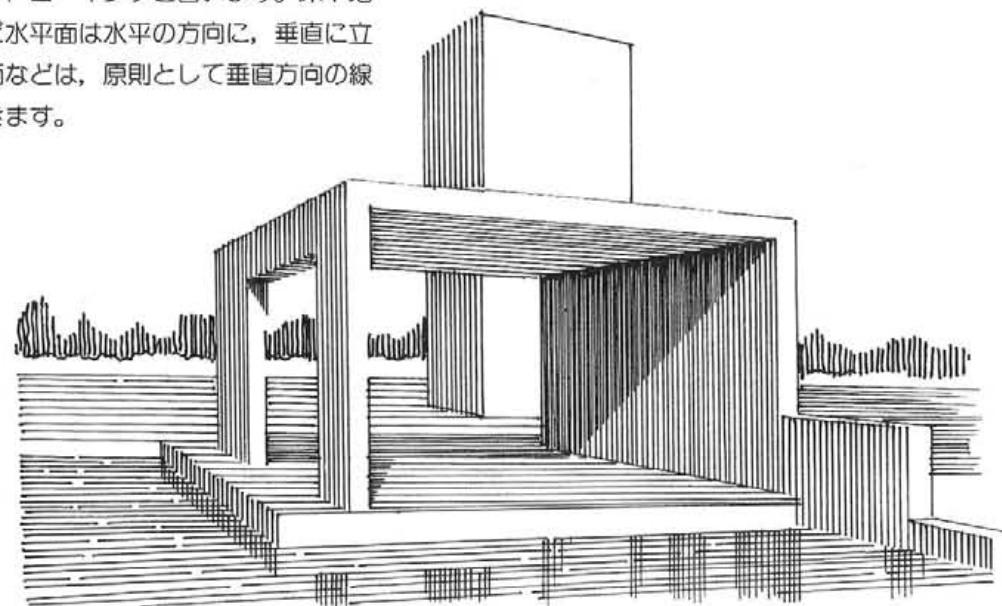
2. より平滑で硬い感じを出すには垂直のタッチを加える
定規で描いた水平線に対して、映り込みなどを表すタッチを垂直に加えます。水面などは水際の樹木や、建物が対象になります。大理石などの床面は壁や家具が位置する部分にタッチを入れます。



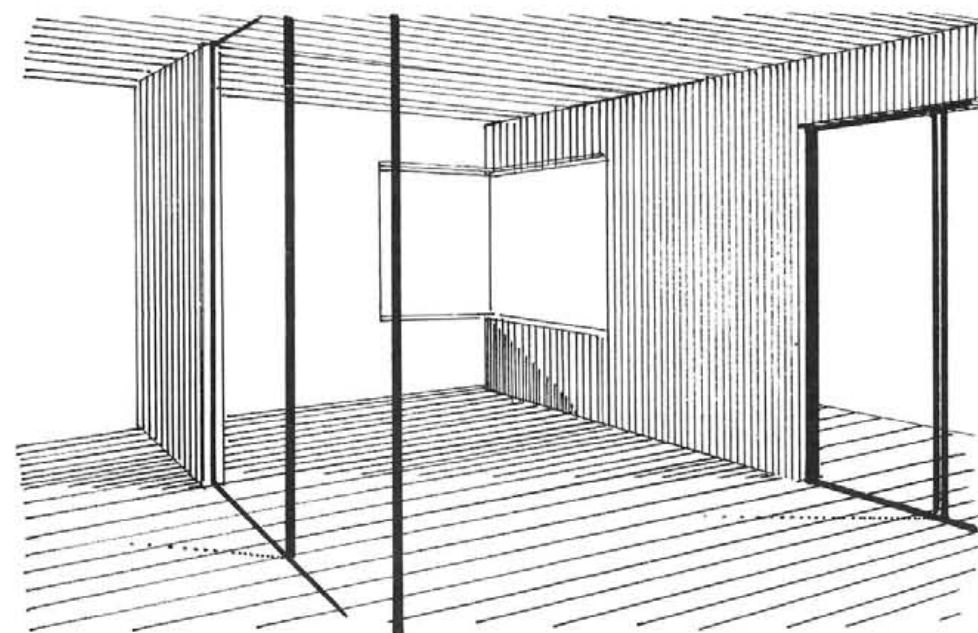
<ポイント> 垂直のタッチは、具体的な形の映り込み表現にはあまり用いないほうがよい。

3. 線の間隔や密度を変化させるラインドロ잉

線や、面の強弱・濃淡を、定規を用いた規則正しい線の集合によって描く手法をラインドロ잉と言います。床や地面など水平面は水平の方向に、垂直に立つ壁面などは、原則として垂直方向の線を描きます。



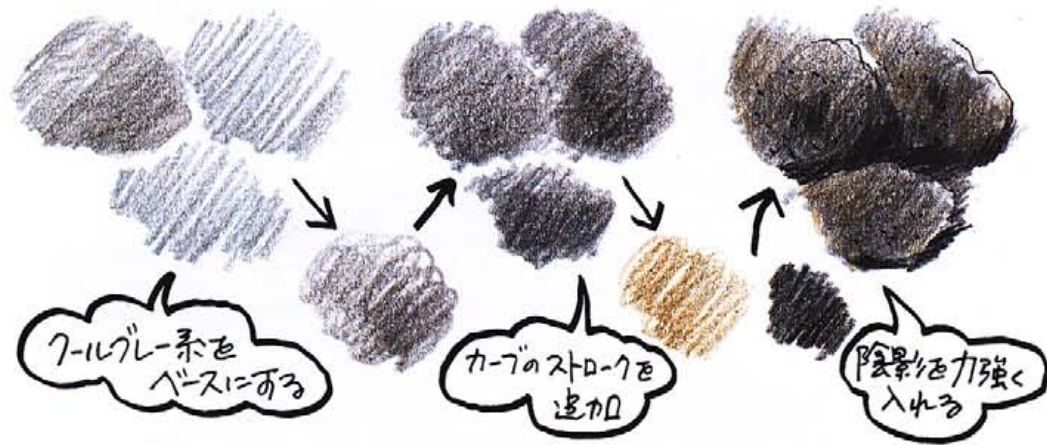
正面、側面、平面で密度を変えて明暗を表現します。線の間隔は約1mm程度にします。無理をすれば線の間にもう1本描ける程度のあきですから、影などの暗部表現に効果的です。



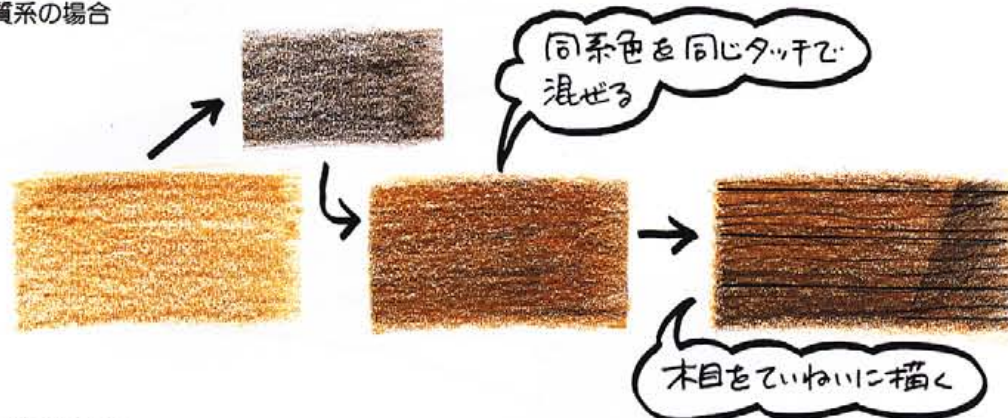
色鉛筆描法のコツ

同系色の混色で深みのある色合いを表現する
筆圧のコントロールに加えて、同じ色調同士を混ぜると深みのある色合いが表現できます。

1. 石系の場合



2. 木質系の場合



3. 樹木などの場合



同系色の混色で深みのある色合いを表現する

外壁が同色で重なる場合は遠いほうから濃淡をつけます。細かいところは定規の縁やテープを使ってきちっとした線を出します。最後に、黒で影の始まりや面の变化するところに定規で線を描くと、しまって見えます。

